様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月 １７ 日現在

機関番号：３３９２１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2012～2013
課題番号：２４７３０６０５

研究課題名（和文）青少年の自傷行為のリスク要因の検討と援助方法の考案

研究課題名（英文）Risk factors and intervention of adolescents who engage in self-cutting.

研究代表者
濱田　祥子（HAMADA, SHOKO）

愛知淑徳大学・学生相談室・助教

研究者番号：６０６１５０３７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　1,800,000円、（間接経費）　540,000円

研究成果の概要（和文）：中学2年生1,632名を対象に質問紙調査を実施し、自傷行為の経験、いじめの被害及び加害の経験、学校環境の認知、情緒と行動上の問題について尋ねた。分析の結果、男女共通していじめの被害と加害の双方にかかわっている者といじめの加害のみにかかわっている者は、そうでない者に比べて自傷行為を行う可能性が高いことが示された。また、女子においては学校で守られていると感じている者はそうでない者に比べて自傷行為を行う可能性が低いことが示された。援助の際には特にいじめの加害と被害双方にかかわっている者に目を向ける必要があるといえる。

研究成果の概要（英文）：The participants of this study were 1,632 students in second-year of the junior high school. They completed the questionnaire about experience of self-cutting, bullying, victimization, questions to assess perceived safety and care at school and Strength and Difficulty Questionnaire. The results indicate that those who are bullie-victims and bullies are higher risk for self-cutting both among males and females. Among females, those who feel to be cared at school are less likely to engage in self-cutting. It is important to intervene those who are engaged in bullying and victimization.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学・臨床心理学

キーワード：自傷行為　いじめ　思春期

１．研究開始当初の背景

近年，自傷行為を行う中学生は24.5%にのぼるともいわれており（Izutsu et al., 2005），学校現場においては自傷行為者への対応へのニーズが高まっている。従来，わが国においては，自傷行為に関して，事例研究を中心に行われてきた（柏田, 1985；西園・安岡, 1979；竹内他，1986）。近年になり，青少年における自傷行為の経験率を検討する研究が行われ始めている（Izutsu et al., 2006；山口・松本, 2005）。自傷行為者の特徴としては，多動傾向との関連（Izutsu et al., 2005）や，自傷行為者は感情を把握することが苦手であることなどが明らかにされている（濱田他，2009）。わが国におけるより近年の調査においては，中学生における自傷行為と抑うつ傾向の高さとの関連が示されており（大嶽他，2012），学校におけるメンタルヘルスの問題を考える上で重要な問題であるといえる。

以上のように，様々な研究が進められてきているものの，自傷行為者の対人関係における特徴や学校などの周囲の環境をどのように認知しているかについては十分に検討されておらず，学校現場における援助の指針も十分にまとめられているとはいいがたい。

２．研究の目的

本研究の目的は，自傷行為のリスク要因に関して，対人関係上の特徴から検討することである。本研究においては，対人関係の特徴として，いじめに着目する。また，学校におけるいじめを教職員などの大人や周囲の生徒が止めようとするか，また，安心して学校生活を送れているかという学校環境の認知について尋ね，それらと自傷行為の関連について検討する。これらの結果から，自傷行為者の対人関係上のリスク要因を検討し，援助方法を検討する。

なお，本研究においては，自傷行為を刃物など鋭利な器具を用いて自身の身体を切る行為に限定した。

３．研究の方法

徳島県内の中学２年生1,632名（男性787名，女性845名）を対象に質問紙調査を実施した。平均年齢は13.94歳であった。

質問紙の内容は自傷行為（自身の身体を刃物など鋭利なもので切る行為）の経験の有無について，行動と情緒の問題についての項目（Strength and Difficulties Questionnaire(SDQ)；Goodman et al., 1998），いじめの被害及び加害についての経験，学校環境の認知を尋ねる項目４項目（学校にいると守られていると感じますか？/学校の先生はあなたを心配していると感じますか？/ある生徒がいじめられている時，先生や他の大人たちはどのくらいいじめを止めようとしますか？/ ある生徒がいじめられている時，他の子どもたちはどのくらいいじめを止めようとしますか？）（「ほとんどいつも」「しばしば」「ときどき」「決してない」の４件法）であった。

いじめに関しては，最近６ヶ月における学校におけるいじめの被害及び加害の経験，学校以外の場面でのいじめの被害及び加害の経験，インターネット上のいじめの被害及び加害の経験について尋ねた。いじめに関しては，3領域のいずれかにおいていじめの被害及び加害を経験している者を「被害-加害経験者」，3領域のいずれかにおいていじめの被害を経験している者を「被害経験者」，3領域のいずれかにおいていじめの加害を経験している者を「加害経験者」とした。

学校環境の認知を尋ねる項目に関しては，「決してない」と回答した者の特徴を把握するため，分析の際には各項目に対して，「ほとんどいつも」から「ときどき」と回答した者を，環境を肯定的に認知している群，「決してない」と回答した者を否定的に認知している群とし，2群にコーディングし，分析を行った。

４．研究成果

(1)自傷行為及びいじめの経験率について

自傷行為及びいじめの被害と加害の経験率について男女別に検討した。自傷行為は男子が5.5%，女子が11.3%であり，女子において有意に多いという結果であった（$p < .001$）。また，いじめに関しては，「被害-加害経験者」に関しては男子が8.6%，女子が5.5%であり，男子において有意に多い（$p<.01$）という結果であった。「被害経験者」に関しては男子において9.8%，女子において10.6%であり，有意な差は認められなかった。「加害経験者」は男子が12.8%，女子が8.0%であり，男子において有意に多いという結果が得られた（$p < .01$）。

(2)いじめ，学校環境の認知と自傷行為の関連について

いじめ及び学校環境の認知と自傷行為の関連について検討するため，段階別にロジスティック回帰分析を行った。自傷行為の経験の有無を従属変数とし，第一段階はいじめの諸変数を独立変数としてロジスティック回帰分析を行った。第二段階は学校環境の認知の諸変数を独立変数として，第一段階において有意な関連が認められた変数と学校環境の認知の諸変数を独立変数としてロジスティック回帰分析を行った。最終段階は第三段階で有意な関連が認められたものとSDQを独立変数としてロジスティック回帰分析を行った。SDQ

に関しては，統制要因として独立変数として投入した。ここでは，最終的な分析の結果について述べる。なお，行動と情緒の問題に関しては，いじめに関する項目と向社会的行動に関する項目は今回の分析からは除外している。

ロジスティック回帰分析の結果について述べる。男子においては，いじめの「被害-加害経験者」はそれ以外の者の約5倍，いじめの「加害経験者」はそれ以外の者の約4倍，自傷行為を行う可能性が高いことが示された。女子においては，いじめの「被害-加害経験者」はそれ以外の者の約5倍，いじめの「加害経験者」はそれ以外の者の約2倍，自傷行為を行う可能性が高いことが示された。また，女子においては学校で守られていると肯定的に認知している者はそうでない者に比べて自傷行為を行う可能性が低いことが示された。いじめの「被害経験者」に関しては，男女共通して直接的な関連は見出されなかったものの，いじめの被害経験がSDQで測定した情緒や行動上の問題が媒介し，自傷行為と関連している可能性が示唆された。

(3)考察

男女共通して，いじめの被害及び加害にかかわっている者が自傷行為（自身の身体を切る行為）を行うリスクが最も高く，加害にかかわる者も自傷行為を行うリスクが男女共に高まるという結果が示された。自傷行為者の援助を行う際にはいじめの被害にあっている者だけでなく，加害にかかわっている者に注意を向ける必要がある。他者に向ける攻撃性を自身にも向けているのではないかと推測される。また，いじめの被害にあっている者に関しては，情緒や行動上の問題を抱えている可能性が示唆された。いじめの被害にあっている者に対しては，問題が顕在化していなくても，抱えている情緒的な問題にも目を向け，介入を行う必要があるといえる。

女子に関しては，学校で守られていると感じていることが自傷行為のリスクを低減することが示された。学校現場においては生徒の周囲の教職員が，生徒が学校で守られていると感じられるような情緒的なサポートを行うことが，特に女子に対して重要であることが示された。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計１件）

（研究代表者，研究分担者及び連携研究者には下線）

① 山脇彩・小倉正義・濱田祥子・本城秀次・金子一史，「女子中学生におけるインターネットの利用の現状とインターネット依存とメンタルヘルス上の問題との関連」，2012年，『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要』査読無し　第59巻，名古屋大学大学院教育発達科学研究科，pp53-59.

〔学会発表〕（計５件）

① Hamada, S., Ogura, M., Yamawaki,A., Honjo, S., Sourander, A., Kaneko, H. Bullying and self-cutting among Japanese adolescents. 15th International Congress of European Society for Child and Adolescent Psychiatry. 2013.7.6～7.10 Dublin, Ireland.

② 山脇彩・小倉正義・濱田祥子・本城秀次・金子一史「中学生におけるネット依存症とメンタルヘルス上の問題との関連」，第31回　日本心理臨床学会秋季大会，2012年9月15日，愛知学院大学.

③ Hamada,S., Ogura, M., Yamawaki, A., Honjo,S., Sourander, A., Kaneko, H. Self-injurious behavior among Japanese Adolescents.20th World Congress of the International Association of Child and Adolescent Psychiatry and Allied Professions. 2012.7.21～7.25. Paris, France.

④ Ogura, M., Hamada, S., Yamawaki,A., Honjo,S., Sourander,A., Kaneko,H. Ijime among Japanese junior high school students –Traditional bulling and cyber bullying. 20th World Congress of the International Association of Child and Adolescent Psychiatry and Allied Professions. 2012. 7.21～7.25. Paris, France.

⑤ Yamawaki,A., Ogura, M., Hamada,S., Honjo,S., Sourander,A., Kaneko, H. Frequency of Internet usage among Japanese junior high school students and the relationship between Internet addiction and the Strength and Difficulties Questionnaire. 20th World Congress of the International Association of Child and Adolescent Psychiatry and Allied Professions. 2012.7.21～7.25. Paris, France.

〔図書〕（計０件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計０件）

○取得状況（計０件）

〔その他〕

なし

６．研究組織

(1)研究代表者

濱田　祥子（HAMADA SHOKO）
愛知淑徳大学・学生相談室・助教
研究者番号：60615037